

序論)

みなさんは、毎朝同じ道を通って職場や学校に向かっているとき、上の空で歩いて「あれ、どうやってここまで来たんだろう」と思ったことはないでしょうか。体は動いているのに、意識はどこか別のところにある。気がついたら目的地に着いていたとか、気づいたら仕事が終わっていたとか、一そういう経験が、あるのではないのでしょうか。

実は、私たちの信仰生活も、同じことが起きることがあります。礼拝に来る、讃美をする、祈りの言葉を口にする。体は動いている。でも、心はどこか別のところにある。そのような状態です。

パウロがコリントの教会に向けて書いたこの手紙の最後の言葉は、そんな私たちに向けて書かれたような言葉です。13 節にある「目を覚ましていなさい」ということば。これは怒りの言葉でも、責める言葉でもありません。コリント教会を愛する牧者であるパウロが、眠りかけている羊に向けて、静かに、しかし真剣に語りかけている言葉です。

パウロはこの手紙を書き終えるにあたって、この手紙の総括ともいえるようなメッセージを残しています。それは教会がどのように歩み、何を模範にし、どのように実践していったらよいかというメッセージです。

今日は、この手紙の結びの箇所から、私たちがなすべき歩み方を改めて教わりたいと思います。

1) 総括的な 5 つの命令

パウロはまずこの手紙の総括となるような 5 つの命令を 13 節 14 節で語っています。13 節 14 節を読みましょう。

16:13 目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。雄々しく、強くありなさい。

16:14 一切のことを、愛をもって行いなさい。

ここにある 5 つの命令とは、「目を覚ましている」ということ、「堅く信仰に立つ」ということ、「雄々しくある」ということ、「強くある」ということ、そして「一切のことを、愛をもって行う」ということです。一つ一つ確認していきましょう。

まず、最初に説明したいのはこの5つの命令はギリシャ語では現在命令形が使われており、「継続して、続けなさい」という意味を持っているということです。一回実行すればそれでいいということではなく、そうあり続けるということが求められているということです。それを踏まえた上で5つの命令をみていきましょう。

① 「目を覚ましていなさい」

まずは、「目を覚ましていなさい」という命令、これはコリント教会が霊的に眠っている状態にあったということです。具体的に言えば、彼らは教会の中に、性的な罪を行っている人がいたにも関わらず、それを見て見ぬふりをしていました。また一番大切なものを見失って、派閥争いなどをし、さらには、「蘇りはない」などと間違ったことを言っている人たちに惑わされていた状態にあったのです。

パウロはこの手紙で教会が覚えておくべき真理を細かく説明し、その上で「目を覚ましてい続けなさい」と命じています。

私たちは罪や偶像礼拝、または偽りの教えといったものに対して鈍感で眠ったままの状態ではいけないのです。そのようなものに惑わされることなく、いつも目を覚まして、主が示してくださった真理の中を歩み続けていく必要があります。

② 「堅く信仰に立ちなさい」

また「堅く信仰に立ちなさい」というのは、パウロがこの手紙で語っていたキリストという土台に建てられることであり、イエス・キリストの十字架の贖いと復活という福音をしっかりと保つことです。

コリント教会の人たちはキリストではなく人を見ていたので、自分はパウロ派だ、自分はアポロ派だなどといって派閥争いをしていました。キリストの復活の意味をしっかりと理解していなかったから、蘇りがないなどという教えに惑わされていたのです。

だから私たちはキリストという土台の上にしっかりと立ち、そして【主】イエス・キリストの十字架の贖いと復活、特にこの手紙においては復活の信仰にしっかりと立つことが求められています。

人ではなくキリスト、そしてキリストによって与えられる復活の希望、これを握りしめて歩み続けていくことが、私たちにとって大切なことなのです。

③ 「雄々しく」

そして、「雄々しく」・・・古い訳だと「男らしく」という訳になっていますが、これは困難の中でも勇氣ある決断と行動をしていくことです。

コリント教会の人たちは、自分たちは、何でも持っていて満たされている。そのように思い王様のように高ぶっていました。(4:8)でも、パウロは神様の導きの中で死刑囚や見世物のように扱われ(4:9)、飢え、渇き、様々な困難にあいながら(4:11-13)、ののしられては祝福し、迫害されては耐え忍び(4:12)それでも福音を伝え続けました。だからこそ、そのパウロの福音伝道の結果がコリント教会だったのです(4:15)。そして、パウロはそのように自分たちの歩みを紹介しながら、「私に倣う者となってください」(4:16)とこの手紙で勧めています。

だから、パウロがいう「雄々しく」というのは、自分たちこそが正しく、あの人たちは間違っていると声高に叫んで、自分の正義を主張することではなく、例え多くの迫害や困難があったとしても、勇氣をもって福音を伝え、福音に生き続けることなのです。

現在、残念ながらアメリカの福音派の多くの人たちは、イランへの攻撃を「正しい戦争」と書いて「正戦」といいながら、これが黙示録に書かれているような終末預言の成就だと言っています。もちろん、それを否定している人たちもいますが、でも、事さらに自分の正しさを主張している人が多いのは確かです。

でも、あれが福音でしょうか。あれが【主】イエス・キリストが十字架の上でなされたことでしょうか。そして、あれがパウロの生き方にならうやり方でしょうか。違いますよね。例え、イスラム過激派の人たちからテロ攻撃を受けたとしても、執拗な嫌がらせや、攻撃にさらされたとしても、福音を語り続けるのが、聖書が教える「雄々しい」歩みなのです。

それこそ、アメリカでも一部の人が勇氣をもって声をあげているように、血肉の戦いが自分たちの戦いではないと主張し、勇氣をもって平和と福音を語り続けるのが、雄々しい生き方ではないでしょうか。

④ 「強く」

そして、「強く」です。これは「雄々しく」と似ているように感じるかもしれませんが、ギリシャ語では **κραταιοῦσθε** (クラタイウステ) という受け身のことばが使われています。つまり、この箇所がいう強くとは、自分で強くなるのではなく、「強くされつづけなさい」という意味です。誰に強くされるのですか？ もちろん、私たちの【主】である父、子、聖霊なる神様によってです。

パウロは、この手紙の中で「十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。」(1:18)と語り、「あなたがたが経験した試練はみ

な、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」(10:13) と語り、更には 12 章で聖霊の賜物を、15 章ではキリストによる勝利を語っていました。

私たちは【主】によって力を得、試練を耐え、賜物が与えられ、そして、死に勝利していくのです。だからこそ、私たちはいつも【主】の力を受けて、強くされ続けることが大切です。

みなさん、みなさんは【主】によって強くしていただくことを大切にされているでしょうか。【主】の導き、【主】の力、【主】の勝利を受け取る時を十分に持つ歩みをしていきましょう。

⑤ 「一切のことを、愛をもって行いなさい」

そして、こうした四つの命令を包み込むように、パウロは「一切のことを、愛をもって行いなさい」と命じています。

これはこの手紙で一貫して語られたことです。分裂分派をしている人たちを諭す時には「愛するわたしの子」と呼びかけ、偶像に献げた肉の問題のときには、「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます」と言い、間違った聖餐式をしている人たちには、貧しい人たちに対する愛の欠如を指摘し、賜物についての箇所では、愛がなければ何の役にも立たないと述べ、「愛はいつまでも絶えません」と宣言していました。

私たち、教会は愛をもって全てのことをなしていかなければいけないのです。もう既に、何回も問いかけられていることですが、私たちは愛をもって、礼拝をし、愛をもって賜物を用い、愛をもって日常生活を送っているのでしょうか。

2) 模範 -仕える人に従う-

今日の箇所には、問題を抱えていたコリント教会の人たちが尊敬し、従い、模範とすべき人たちが紹介されています。それがステファナ一家です。15-17 節を読みましょう。

16:15 兄弟たちよ、あなたがたに勧めます。ご存じのとおり、ステファナの一家はアカイアの初穂であり、聖徒たちのために熱心に奉仕してくれました。

16:16 あなたがたも、このような人たちに、また、ともに働き、労苦しているすべての人たちに従いなさい。

16:17 ステファナとポルトナトとアカイコが来たので、私は喜んでいます。あなた

がたがない分を、彼らが埋めてくれたからです。

16:18 彼らは、私の心とあなたがたの心を安らがせてくれました。このような人たちを尊びなさい。

要約すると、コリント教会にはステファナというコリントの町があるアカイア地方で最初に救われた家族がいました。ステファナはパウロが唯一直接洗礼を施した人です(1:16)。この家族はコリント教会の最初からいた人たちであるにも関わらず、派閥のリーダーとして偉ぶるのではなく、教会の人たちのために一生懸命奉仕していたのです。富川でいうなら岩寺さんや谷井家の人たちのような人です。

彼らは知識をひけらかすのではなく、忠実に仕えていた。だから、パウロは(16節表示)「このような人たちに、また、ともに働き、労苦しているすべての人たちに従いなさい」と命じています。

また、ステファナは、山積みになったコリント教会の問題を解決するために、ポルトナトやアカイコと一緒にパウロのところに、どうしたらいいかを問う質問状を携えて来て、コリント教会の人たちに代わって、教会の現状を細かくパウロに伝えたのです。それはパウロにとってコリント教会との繋がりを確認する喜ばしい出来事であり、パウロの心を安らがせてくれる出来事でした。

パウロは18節で、この人たちが心を安らかにしてくれたのは、パウロだけでなく、「あなたがた」つまり、コリント教会の人たちの心をも安らがせてくれた。と述べています。

これはどういうことかという、ここでいう「安らぐ」とは、「重荷を降ろして休ませる」とか「疲れた人に安息を与える」という意味をもっており、ステファナたちがコリント教会の問題をパウロに伝えてくれたことによって、コリント教会の重荷、つまり、諸問題を解決するのに役立ってくれた。という意味でしょう。

彼らは、コリント教会の問題解決のために、特別な知恵を述べたり、優れたリーダーシップを発揮したりしたわけではありません。ただ、パウロと教会の架け橋となっただけです。しかし、その教会とパウロをつなぐ働き、人と人をつなぐ働きが、パウロと教会の重荷を軽くすることに繋がっていったのです。

パウロは「このような人たちを尊びなさい」と命じています。

私たちは、表にたって目立った働きをしている人、強い言動をしている人、そういう人に注目しがちですが、寧ろ、尊敬し、従い、模範とすべきなのは、例え教会のリーダーになっていなくても、忠実に人々に仕え、愛をもって人と人とを繋ぐような働きをしてくれる人たちなのです。

3) 実践 -まずは挨拶から-

では、私たちはそのような人たちを模範にし、従うためには何からはじめていったらいいでしょうか。その最初の一步となる実践こそが、「挨拶」だと私は思います。19 節から 21 節を読んでみましょう。

16:19 アジアの諸教会がよろしくと言っています。アキラとプリスカ、また彼らの家にある教会が、主にあつて心から、あなたがたによろしくと言っています。

16:20 すべての兄弟たちが、あなたがたによろしくと言っています。聖なる口づけをもって互いにあいさつを交わしなさい。

16:21 私パウロが、自分の手であいさつを記します。

19 節、20 節と「よろしく」と訳されていることばは、心を込めた挨拶、温かい挨拶と訳した方が、もとの言葉に忠実です。この手紙を書いているパウロがいるエペソがあるアジア地方の教会、また、元々はコリントにいてエペソでは家の教会を開いていたアキラとプリスカ、そして、その家の教会と、その他のすべてのキリスト者たちが、遠いコリントの教会に対して心を込めて、丁寧な挨拶を送っています。

ここに空間を超えたキリスト者同士の愛の一致、教会としての一体性が現れています。教会は、今、私たちが所属している地方の教会がすべてではないのです。住んでいる場所、集っている所、さらには教会としての規模が違っていたとしても、私たちは、互いに愛をもって挨拶をし合う一つの教会なのです。

みなさん、「挨拶」はとっても大切です。挨拶には「あなたの存在を認めています」というメッセージがあり、相手への信頼と愛を現す意味があるからです。逆に挨拶をしない関係というのは冷めた関係であり、相手を軽んじ、無視する関係だといえるのではないのでしょうか。

アジアの諸教会、アキラたちの家の教会、及び、すべてのキリスト者たちは問題が多いコリント教会を認め、愛していました。だから、パウロの手紙を通して、温かい挨拶を送っているのです。そして、そのような愛ある挨拶が向けられているからこそ、パウロはコリント教会の人たちにも「聖なる口づけをもって互いにあいさつを交わしなさい」と命じています。

「聖なる口づけ」というのは、当時、親愛と平和を示す挨拶だったようです。コリント教会は教会内で派閥争いや立場の差による間違った聖餐などが行われていましたが、それでも諸教会から愛されていました。だから、その【主】にある愛の教会の一員として、その愛の実践の第一歩として「聖なる口づけをもって互いにあい

さつを交わしなさい」と勧められているのです。

みなさん、日本には「口づけを交わす」文化はありませんから、それは難しいかもしれませんが、【主】にある者とされ、【主】によって聖とされた教会として、互いに心からの挨拶を交わすことを大切にしていきましょう。

そして、その挨拶を交わし合う愛の教会の一員として、パウロも自分の手で挨拶を書き送っています。

4) パウロの挨拶

それが、22 節から 24 節の部分です。まずは 22 節を読みましょう。

16:22 主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。

挨拶と呼ぶには随分、物騒なことばから始まっていますが、この言葉は当時の教会で日常的に使われていたことばだと言われています。

「主を愛さない者はみな、のろわれよ」・・・非常に過激なことばですが、それだけ教会の歩みには「【主】を愛する」ということが大切だということでしょう。

よく私たちキリスト者の関係は、十字架のように縦と横の関係が大切だと言われます。縦とは神様との関係、横とは人と人との関係ですね。

私たちはまず、【主】からの愛を受け取り、そして、【主】を愛する縦の関係をしっかり持たなければ、兄弟姉妹を愛し、隣人を愛する横の関係を正しく持つことはできないのです。だから、「主を愛さない者はみな、のろわれよ」と当時の教会において定期的に唱えられていました。ただ、ここでいう「呪い」というのは私たちがイメージする悪いことが起こる呪詛のようなものではなく、神様の聖なる裁きの下に置かれることを意味しています。

「呪い」と訳されているギリシャ語「アナテマ」は、元々は「上に置く、献げる」という意味の言葉から来ており、旧約聖書的には聖絶に通じることばです。つまり、その人のすべてを神様の裁きの下に献げることが「アナテマ」なのです。

そして、パウロは「主を愛さない者はみな、のろわれよ」と言った後、【主】の再臨を待ち望む「主よ、来てください」と訳されているマラナタというアラム語の祈りを書き加えています。

【主】を愛さない人にとって、【主】の再臨はさばきの時の到来です。でも、【主】を愛する者にとって、再臨は救いの完成であり、栄光の体を与えられる希望の時です。だから、教会は、【主】の再臨の時にさばきと希望が与えられることを待ち望んで歩いていくのです。

みなさんは、【主】の再臨を待ち望み、【主】を愛して歩んでおられるでしょうか。

そして、最後の23節、24節、これはまさにパウロの愛による祝福の挨拶と言える箇所です。

16:23 主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。

16:24 私の愛が、キリスト・イエスにあつて、あなたがたすべてとともにありますように。

結局、私たちにとって必要なことは【主】の恵みが共にあるということであり、キリスト・イエスにあつて互いに愛し合える関係にあるということなのです。

だから、私たちは、まずは【主】を愛することを第一にし、【主】の再臨を待ち望みながら、【主】の恵みによって互いを愛していくのです。

結論)

この手紙の最後として、パウロは教会に特別に新しいことを求めています。むしろ、教会が教会として生きるために、最も大切なことへと立ち返るように勧めています。

それは、目を覚ましていること。信仰に堅く立つこと。勇気をもって歩むこと。神様によって強くされ続けること。そして、何よりも、一切のことを、愛をもって行うことです。

そして、そのような歩みは、特別な人だけができることではありません。ステファナの一家のように、忠実に仕え、人と人をつなぎ、教会の重荷を軽くする歩みの中に現れていきます。

また、心からの挨拶を交わすという、小さく見える一歩の中にも現れていきます。教会の愛は、大きな出来事だけでなく、日々の具体的な関わりの中で形になっていくのです。

私たちは眠ったまま惰性で信仰生活を送るのでしょうか。それとも、【主】を愛し、【主】の再臨を待ち望みながら、愛によって歩む教会として生きるのでしょうか。

願わくは、富川福音教会、そして日高キリスト教会が、目立つ人や強い人を誇る教会ではなく、【主】にあつて目を覚まし、福音に堅く立ち、愛をもって互いに仕え合う教会とされていきたいと思えます。

だからこそ、礼拝の中だけでなく、礼拝の後の交わりや、家庭の中、そして、日々の生活の中で、まず心からの挨拶を交わすところから始めていきましょう。

主イエスの恵みが、私たち一人ひとりとともにあり、キリスト・イエスにあって、私たちの間に愛が豊かにあるように。愛のこもった挨拶を大切にしたいと思います。

そして、忠実に仕えつつ、目を覚まし、愛によって歩む教会として、今週も歩んでいきましょう。